別紙様式８

研　究　主　論　文　抄　録

論文題目「地域社会形成の契機となる河川計画に関する研究」
(Study on River Planning as Opportunity for Development of Local Community)

熊本大学大学院自然科学研究科　環境共生工学　専攻　社会環境マネジメント　講座
（　主任指導　田中尚人　准教授　）

論文提出者　　　　岩田圭佑
(by　Keisuke Iwata)

主論文要旨
《本文》
本論文は、明治以降の北海道札幌市における開拓時代を対象に、豊平川の河川計画と地域社会の変遷を分析し河川計画と地域社会の連携手法を明らかにすることを目的とする。

第２章では、明治４年から10年にかけての開拓初期において、移住者の入植時における地形条件の克服と動向に着目し、河川改修がそれらに与えた影響を分析し、本研究の位置づけを示した。市街地では春を安定的に迎えることで定住化を促進し、開拓初期の地域社会形成の足がかりとなった一方、開拓村落でも地域社会による水管理が一つのシステムとして成立し始めたことを明らかにした。このように市街地においても村落においても、地域社会が形成される契機として河川計画や河川改修が位置づけられることを示した。

第３章では、明治10年から30年にかけての低水工事期において、移住者の居住地とその動向について着目し、古市公威の河川計画に基づく豊平川の河川改修が地域社会の形成に与えた影響を分析した。市街地では労働者を中心とした地域社会が形成された一方、開拓村落を中心に自発的な水利用に基づく様々な職が生まれることで地域社会による平面的な水管理が成熟し、村落住民の生活を多様な形で支えていたことを明らかにした。

第４章では、明治30年から昭和初期にかけての高水工事期において、それまでの河道特性の変化に着目し、保原元二の河川計画に基づく河川改修が地域社会の形成に与えた影響を分析した。豊平川の堤防が都市計画風致地区に指定されるなど、行政側に面的な付加価値が認識される一方で、住民による水辺空間の利用は個人の必要性に基づく水利用が無くなり、不特定多数の個人によるものに変化したことを明らかにした。

第５章では、分析の内容を統括した。河川計画において市街地の建設事業を位置づけた古市の河川計画や、河川改修事業が市街地の都市計画のきっかけとなった保原の計画が、当時の地域社会と地域計画関係性を反映し受け入れていく上で重要であったことを示した。地域社会の存在は地域計画と地域づくりを関連付ける出来事に起因しており、それらを受け入れ、或いは誘発させる河川計画や河川改修の働きかけの重要性を明らかにした。